慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	方法論史上におけるカール・メンガーの役割
Sub Title	Carl Menger as a methodologist
Author	服部, 成三郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.6 (1955. 6) ,p.462(40)- 474(52)
JaLC DOI	10.14991/001.19550601-0040
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550601-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌　第四十八卷　第六號

資料

方法論史上における
カール・メンガーの役割

服部成三郎

(一)

古典學派が退潮期に入つた、十九世紀なかばを起點として、經濟學の方法論的反省というものが、各種の問題意識の上から行われるようになつたことは、周知の事實である。

英國においては、J・S・ミルが、かかる課題を自らに課し經濟學史上、一つの契機をつくつたし、獨逸では、メンガー、シュモラーの方法論爭が、歷史學派の、古典學派に對する反目意識の存在とも若干からみ合いつつ發生し、後に、M・ウェーバーが、この種の問題を取扱う上での、ある意味での、さきがけともなつた。わたくしは、このような情勢の中で、C・メンガの方法論が占める位置を、再檢討しようとするのだが、この場合、わたくしは、自分自身の關心にしたがうところの、方法論史の一環として、メンガーを取扱うということに重きをおきたいため、その點に關する、若干のまえおきから本稿をはじめたいと思う。

從來、經濟學の方法論的反省という問題が、實は、きわめて多種多樣な意味、內容をもつて、取扱われて來たものであるということは、上に名をあげた、わずかばかりの人々の場合のみについて考えてみても、容易に理解することが出來る。まして、視野をひろげて、多くの論者について考え、特に、獨逸において、哲學者が、この問題の論議に加わつてゆく特殊な事情をも考慮してゆくならば、論點の多樣性に當惑せざるを得ないことにもなろう。「方法論」の名において、ある場合には、單に論理上の手續の一契機が、一方的に强調されるにとどまつたり、單に名目上の繩張爭いがこととされたりした表面的事實は、そもそも、何故、方法論というものを考察對象にする必要があるのかという問題さえ、人々の間に生ぜしめる所以であるけれども、そのような外見上の混亂をも含めて、わたくしは、方法論議、方法論爭というものに、關心をもたざるを得ない。

なぜかというと、經濟學者達は、彼等の學說の中に語り得なかつた體系構成以前の思想、直觀的、無意識的表象ともいうべきものを、方法論的著作の中に、最も端的にあらわしているのが常だからである。本文の行論から明にされるはずであるが、方法論というものが、單に、論理學上の手續問題のように意識されている場合でさえ、その論者は、決して、それだけのことを論じているのではない。むしろ、そのような、表面的敍述のかげに、彼等が、社會科學の體系に支えている、意義や、限界いわば、社會哲學的見解を內藏しているのであつて、それが、同時に、その方法論そのものの形態——すなわち、この場合では、單に論理的手續の問題であるかの如き樣相——を規定している。……というような、きわめて複雜な、特殊な關係を示しているものなのである。

したがつて、方法論史というものは、一應の意味では、「方法論」という概念そのものの形態轉換の歷史でもあるが、同時にそれは一つの社會思想史的な意義をもつものとして、把握することが可能である。いな、この後者の見地に關連させることによつてはじめて、前者の意義そのものも、浮びあがつてくるのであろうし、社會科學體系の基礎に存在する直觀的理念の理解という意味からして、經濟學史の外延的一分野、あるいは、經濟學史と社會思想史の交流分野として、方法論史を考えるという根據も生じてくるように思われる。

わたくしは、經濟學史が、經濟學の理論史である本筋をそれ自體として否定するつもりは少しもない。

たとえば、若き日のシュムペーターが、M・ウェーバー等の絹篓にかかるところの、Grundriss der Sozialökonomie 中の一部分を受持つて執筆した、Epochen der Dogmen-und Methodengeschichte 1914（「經濟學史」—中山、東畑譯）は經濟學が、形而上學や、社會哲學的理念から解放されて、經驗的見地に立脚するに至る過程を一方において畫き出すと共に、他方、經濟理論そのものの、歷史的發展を、全く純粹經濟學的に、等質的に捉握し、現在の理論に包攝擴大せしめられた過程そのものを畫き出したことによつて、屢々問題にされた著書であるが、この著によれば、古典派經濟學者が、自然法的理念をもつていようと、フィジオクラートが、またこれと相似た社會哲學を有しようと、ジェヴオンズが功利主義思想を禮讚しようと、それは、彼等が純粹理論の問題意識を持ち得なかつたということを意味するのみであつて、彼等の、個々の理論が論理的客觀性を持つていなかつたことを意味するものではない以上、そのような理念と、學說は、別箇に認識され得るし、またされなければならないものである。(註一)「地球が、平板と考えられていたとき、それだからといつて、ある一定の地域が、全く立派に記載され得ないことがあろうか。(註二)」したがつて、學說史は、一本道の理論史として理解される。……というのである。

このような見解が、たしかに一面の眞理を表明していることは否定し得ないところである。にも拘らず、この書の方法では對立する學派、體系が有する、固有の全社會科學的ビルド、社會觀上の相反が、理論そのものに與える意義の相異、ある場合には、經濟學的諸範疇そのもの意義の相異として現れる所以を理解するという課題が、更に、後に殘されるということも否定し得ないところであろう。たとえば、マルクシズムの理解に至つては、彼なりの解釋以上に出でないであろう。關心の相界とか、觀點の相異とかは、純技術的な意味からとは限らないのであるから、全社會科學的パースペクティヴの下に、學說史を「理解」することが、すくなくとも「體系」の把握のためには、缺

くべからざる仕事であるということが、當然考えられるであろうし、事實、多くの人々によつて考えられても來たことなのである。(註三)

一定の經濟學體系は、一定の形態の社會學との關係を規定するであろうし、大きな意味での、政策觀、歷史觀と結びついて現れざるを得ないだろう。かの有名な、Wertfreiheit の主張も、事實としてのかかる綜合的關聯自身を否定したり、單なる分離を說いたりしたものでは決してないのである。(註四)

したがつて、J・S・ミルが、經濟學原理を書いた年、一八四八年を、一つの劃期として、經濟學體系が、一時混迷に陷りその中から、一方において、マルクスの經濟學體系が築き上げられ、他方においては、頭初にのべた人々が、廣義における近代經濟學の體系を、徐々に、再構成しはじめた、きわめて重要な時期における社會科學體系に關する諸問題を、正しく、周到に、彼等自身の問題に則して、認識しようとするためには、このような、「價値關係的理解」が、必然的に要求せられることになるであろう。

方法論史というものが、このような理解の一助として、ある種の役割を果し得るのではないかと、わたくしは考えている。

(註一)　シュムペーター「經濟學史」譯書、七六、一五七、三二四頁參照。

(註二)　同譯書、一六四頁。

(註三)　E・ハイマン「經濟學史」譯書、二六、七頁に、シュムペーターの學史に對する、適切な批評がある。尙、經濟學說全集—河出書房—第二卷、二三〇頁以下の、高島善哉氏の批評をも參照されたい。

(註四)　E・ザリーン「經濟學史の基礎理論」譯書、二七九—八二頁參照。

(二)

以上のべたような意味における、方法論史上の一こまとしてC・メンガーの「社會科學、特に、經濟學の方法論に關する研究」のもつ、意義について考えてみるのが、本稿の課題であるが、まず、第一に、メンガー自身が「方法論」というものを如何なるものと考えていたかということに對する若干の手がかりを求めることから本題に入ることとする。

彼は序文において、「經濟學の本質と、その眞理の形式的性質というものに對する、見解の一致が見られた時代」は、さして以前のことではなく、そのような時代には、人は、歸納法か、演繹法か、というような「本來の、方法論上の問題の研究」に進むことが出來たのであるが、「方法論上の問題が、もつと立入つて研究されることになれば、事態は、一變せざるを得なかつた。」旨を述べ、「國民經濟の法則」の學というものの、意味、內容が、いろ〳〵に規定されはじめたこと。特に、歷史學派の人々が、國民經濟現象の、場所的、時間的差異を記述したり、あるいは、その發展の法則を確認したりすることを以て、斯學の根本課題とするなどをはじめとする、諸々の方法論的見解を表明して以來事態は全く混迷におちいつていることを指摘した後、次の如くにいう。

「目標自體が、なお、かくも全く問題になつている場合に、政治經濟學の諸目標への諸通路（本來の方法論について！）——傍點、挿入句、ともに原文——の研究が、どうして滿足な結果に達することが出來よう。」と。

そこで、彼は、この書も、經濟學の「本質」、「研究の目標」を規定して、この種の混亂を絕つことをその任務とするので、「狹義における方法論」を扱うことを目的とするものではないこと。

しかし、前者さえ解決すれば、後者は、自ら解決するであろうこと。前者の問題に論理學者の智慧を借りることは、さかさまごとであること、などを明にしてから、そのような課題は、斯學の完成のために、あまり重要なことではないが、現代の如き混迷の時期には、その論爭に加わることの意義を認めざるを得ぬという意味の言明をなしている。

ここに、すでに、一つの問題が伏在する。メンガーが、古典學派を、實質的に統一せられた體系とみて、J・Sミルの「論理學體系」をもつて、古典學派の「方法論」とみたのであろうことは、推測に難くないのだが、これを本來の、あるいは、狹義の方法論——論理學の課題——として考えると同時に、他方、自らの仕事を、やはり、方法論（廣義の）として研究しようとしているということがそれである。

ミルの「論理學體系」（一八四三年）が、すでに、このような問題を內藏していた。すなわち、ミルは、その第六卷を、「道德的諸科學の論理」に關する敍述にあてているのであるが、その緖言の中で「實質的には、このような一著において、道德的諸科學の論理學のためになされ得る如きいかなるものも、前五編內において完成された、もしくは、完成されているべきものであり、それに對して、この第六篇は、只一種の補助又は附加でしかあり得ない。何となれば、もしも私が、科學一般のそれらの方法を列擧し、そして特徵づけることに成功したならば道德及社會科學に適用されるべき探究方法は、すでに記述されていなければならぬはずだからである。」と語りながらも、この卷の存在を許容しているのみならず、明らかに、そのような意味での論理學以上の問題を取扱つたからである。さきの序文の言のみをみれば、メンガーは、その點意識的に、方法論の問題を、論理的手續の學から區別して認識したようにおもわれる。

そこで、メンガーの意味する、方法論の問題とは、どのような性質のものであり、どのような內容を持つものであつたかをわれわれは、彼の書から得ることを期待して、その本論を讀み進むことになるのである。

ところが、メンガーのこの書は、周知の如く、歷史學派に對する批判、むしろ、反批判という形で、自らの方法論を說いたものであり、表面的な意味では、理論と歷史との境界線を定め墺太利學派の「經濟理論」の存在意義を確立すると、いうこと

が內容とされているものである。

すなわち、彼によれば、國民經濟現象を、「たとえば、交換、價格、地代、供給、需要等の一般的な本質、もしくは、これらの現象間の定型的關係、たとえば、需要、供給の增減の、價格に及ぼす影響、人口增加の地代に及ぼす影響などを確立しようとすること」が「理論經濟學」の役割であり、これに對して、「個々一定の國民經濟的現象の本質と發展、したがつて、たとえば、一定の民族、または一定の民族集團の經濟の狀態または發展、一定の經濟的制度の狀態または發展、一定の經濟領域における價格、地代の發展などを」研究するのが、「國民經濟の歷史的研究」である。前者は一般的觀點、後者は個別的觀點に立つものである。もちろん、理論は、經驗的、現實的な方針で求める場合もあるし、精密的な方針で求める場合もある。また一口に、歷史といつても、國民經濟の一定の制度とか、國民經濟上の立法の狀態を、生成過程において記述的に研究するような場合の――法律や言語の生成研究のごとく。――狹義の歷史的方針、あるいはさらに、統計的方針、また、具體的な、一定の地代の騰貴を、理論經濟學の應用下に理解するというごとき際の理論的方針など、幾多の方針が採用され得るのであつて、それらのことを正しく認識することはきわめて重要なことであるけれども、歷史と理論を、根本的に區劃する原理は、一方が個別的關心、他方が一般的關心の上に立つているということである。このような認識に立つならば、歷史學派の人々が、歷史的方針を理論に要求することは、具體的國民經濟現象の理論的理解（歷史の仕事）と、國民經濟の理論とを混同した結果だということがわかる。

ただし、この際、對象であるところの、國民經濟現象が、發展するものであるということは、もちろん認めなければならぬ。所有、交換、貨幣、信用の諸現象をみても、部分的には、すでに幾千年來、繰返し、あらわれている現象ではあるけれども、今日のそれと、過去の時代のそれとでは、全く、その現象形態を異にしていることは當然のことである。

したがつて、理論は、その現實主義的、經驗主義的方針による場合は、一定時期において考察するのみでは、不完全であろうし、精密主義的方針による場合でも、その理解さるべき對象の範圍は、變更、擴大され、研究目標の修正がなされなければならない。

しかし、そうだからと言つて、一般的、精密的、經濟理論の存在を否認し、かの發展段階理論の如きものをもつて、經濟理論にかえたりすることが正當であるということには少しもならない。

メンガーのこの書における論旨は、ごく簡單にいえば、以上の如きものであり、そのような認識とからみ合つて、一般的觀點の下に立つ「理論」は、究極において、論理的構成的性格をもつということ、すなわち、經濟理論は、經濟性（Wirtschaftlichkeit）の原理を、一面的に、抽象するという意味合から

して、假設的、非經驗的性格をもつのが、當然であり、そのためにこそ、精密科學たり得るのであるという、彼の主張がなされていること、これらのことは、ここにあらためて記すまでもない常識上の事柄である。

しかし、先に觸れた、序文の要旨から考えてみると、彼は、廣義の方法論として、これらの諸點をのべたはずであり、したがつて、方法論の問題は、これに盡きていると信じてもいたらしい。

そも〳〵、メンガーも、古典學派の體系を改革するという意圖においては歷史學派と共通のものを持つていた。（序文參照）しかし、メンガーによれば、歷史學派は、方法論的な、包括的な洞察にもとずくことなく、經濟學體系の改革にのり出した。そこでは、特殊的な、研究方針（Richtung）の一、二が、强暴的に主張され、斯學一般の方法（Methode）として說かれた。その同じ攻擊の矢は、やがてメンガー自身の理論體系の上にも向けられることともなり、經濟學の新しい體系を、斯學諸部門の位置づけをふくめての、普遍的な展望の上に、築き上げるという課題は、大きな混亂の中に見失われかけてきた。したがつて、歷史、理論、政策を、原理的に分離して、認識するという仕事が、彼の方法論（Methodik）、體系論（Systematik）の任務となつた。――このことは、たしかに疑問の餘地がない。しかし、そうだからといつて、理論、歷史、政策の分離という形式的な問題が、方法論的反省ということの意味であり、その意味から、メンガーは正しく、シュモラーは誤つていたといふことで、方法論論爭の問題を片づけてしまおうとしたならば、われわれは、何の問題をも見出すことが出來ずに終つてしまうであろうし、それではまた、何事も理解したことにならないであろう。

メンガーが、以上のような「方法論」を行つている根本にはかの「國民經濟學原理」――一八七一――の認識を中心におくところの、彼獨自の、社會科學一般の展望――社會觀が存在しており、そのような見地から、理論や歷史の意義の相異というものを基礎付け、意味づけていたということは、もちろんのことであつて、その意味からすれば、彼の、歷史學派批判は、他方においては、何らかの形で古典學派との關係をも意識することが可能であるような、より高い次元の問題を含んでいるはずであり、また事實含んでいたのである。ところがいま見たように、彼は、歷史學派の誤謬は、歷史と理論の境界を越境したことにあつて、本來對立すべからざる問題を、對立にもたらしたことにある。という表現形式をとつたため、その形式的部分が、彼自身の主張から別箇に、自明の理として存在するような外觀を呈してしまつた。もしも、この混亂を除去することのみが、方法論の課題であるならば、古典學派との間の問題は、方法論的問題では有り得ず、單に、理論內容の對立があるのみ、ということになり、內容と形式は、無關係に切り離されてしまうことになるであろう。メンガーの「方法論」とは、少くとも、事

實の上において、斯くの如きものに盡きているとは考えられない。理論と歴史を區別するとか、抽象的精密理論を、論理的法則として、經驗的法則から區別するとかいう問題は、實はそれ自身、より大きな問題を内藏して論ぜられているのである。われわれは、その問題を掘りさげる必要をみとめる。

(三)

そこで、彼が自らの理論觀を、どのような原理の上に展開したか、それが、背後に、どのような、社會本質觀を内藏していたかということをこの書の中に、たずねることが、以下の課題となる。彼ののべた言葉のいくつかを引こう。

「アダム・スミスと、彼の學派とは、人間經濟の複雜な事象一般、また、人間經濟の社會形態、別して、〃國民經濟〃を、現實の事態に對應して、單獨經濟の努力に還元し、國民經濟を單一經濟の合成果として、理論的に理解せしめるということを忽せにしてきた。彼等の努力は、むしろ、確に、主として、全く無意識に、國民經濟を上述の擬制の觀點の下に（註、メンガーは國民とは、自ら欲求し、勞働し經濟し、競爭する主體ではないから、その意味においては國民經濟とは擬制であるという。）理論的に理解せしめるということに向けられている。しかるに獨逸歴史派國民經濟學者は、意識して上述の誤った見解に追隨した。」[註二]

一體、歴史學派の人々が、スミス理論を萬民主義、永遠主義非歴史主義として非難したことに關しては、メンガーは、スミスを擁護する立場に立つたのであるが、ここに引用する點ではスミスを、歴史學派攻擊の引合に出して攻擊している。單一現象とは、メンガーによれば、集團現象に對立する概念であつて、一般現象に對立するものではない。「一定の民族、國家、一つの具體的な國民經濟、一つの自治體等は、個別現象ではあつても決して、單一現象ではなく、（集團現象である）他方、財、使用價値、企業者、等の現象形態は、一般的現象ではあるが、決して集團現象ではないのである。」[註三] そこで國民經濟現象を、「その眞の要素、すなわち、國民の中においての諸單一經濟にまで溯り、前者が後者から組成される法則を研究することに努め」なければならない。と彼は言うのである。古典學派の經濟學と、彼自身の經濟學との特質の相異を、メンガーは、この言葉で表現し盡くし得たと信じたわけのものでは、もちろんないであろうが、われわれは、この語のもつ、方法論的意義について、關心を示さないわけにはゆかない。この「單一的經濟現象論」は同時にまた、次のような命題とも結びつく。

「經濟學は、たとえば、市場價格や、爲替相場、金本位、銀行券、商業恐慌などのように、〃國民經濟的〃性質をもつ、あの人間經濟現象の一般的本質ばかりでなく、人間經濟の單一現象の本質、たとえば、個人の欲望の本質、交換の本質をも、否、全く主觀的な性質をもつているので、單に個人において現れるにすぎないような現象、たとえば、主觀的現象としての使用價値の本質さえも、研究しなければならない。この場合、どうして斯學は、歴史のみを源泉とすることが出來ようか。」[註三] かかる主張が、「人間經濟の最も本源的な要因は、欲望、人間に對し、直接自然の提供する財貨（享樂手段ばかりでなく、生産手段も含めての）及び、欲望の可能な限りの、最も完全な滿足（財貨欲求の出來得る限り、完全な充足の）追求である。」[註四] という、彼の〃經濟性の法則〃に結集的に表現せられることとなり、さらには後に、マックス・ウエーバーによつて鋭く批判せられたところの、次のような、彼の自然科學的社會觀にまで發展する。

「精密的經濟學は、社會現象、または人間現象、否、通常、〃國民經濟現象〃とよばれるあの社會現象さえも、一般的且つ全體的に、われわに理解させる課題をもつものではなく、只、人間生活の特別な、勿論最も重要な經濟的側面の理解だけを吾々にあたえることを課題とするところの理論である。他方、人間生活の他の諸側面の理解は、人間生活の構成を、人間生活の他の諸傾向の觀點の下に（例えば公共心、法律觀念の嚴密な支配などの觀點の下に）われわれに意識させるところの他の諸理論によつてのみ、獲得せられ得るであろう。」[註五]

「斯樣な研究方針（註―精密的、一面的）を追求することによつて、吾々は、多くの社會的理論に到達する。これらの社會理論のそれぞれは、勿論人間活動の、ある特別な側面（完全な經驗的現實性を捨象して）を理解させるにすぎないが、しかもその全體は、斯樣な研究方針に相應した諸理論が、他日認識された曉には、自然現象の同樣な觀察の結果である、あの理論的諸科學が、自然現象についてのわれわれの理解を開いたと類似の仕方で、人間現象を理解させるに至るであろう。人間現象の個々の理論でなくて、ただその全體だけが、他日、それが究明された曉には、理論的研究の現實的方針の結果と一緒になつて完全な經驗的現實性においての社會現象の、人間精神にとつて到達可能な限りの、最も深い理論的理解を開くであろう。」[註六]

以上、引用した、いくつかの文章から、われわれは、彼の經濟理論觀を中心とする、方法論的立場の特質というものを、容易に理解し得ることであろう。

すなわち、まず、彼の、理論觀の素材をなす〃經濟性〃の法則とは、對自然的な、財―主觀價値―個人、の關係として、それ自身、きわめて超歴史的な原理として、類概念的に構成せられていること。經驗的な、現實的な意味での、個々の差はもちろん認めるけれども、「國民經濟」は、第一義的には、かくの如き、個人の評價、選擇行爲の複合體として、「國民經濟」を原理的に説明するということは、當然であるという主張が、ここに結びつけられていること、そして、この原理の、精密的抽象的性格が、彼にあつて、つねに、自然科學との比喩によつて、すなわち、自然科學が、現實には、そのまま純粋には存在しない元素を抽象するように、社會科學は、純粋な〃經濟性〃を抽象するというように説かれていることは、かかる超歴史的にとらえられた對象の意義規定と考えあわせて、決して單なる、抽象

一般の論理的な比喩にとどまつていないこと。などを、人々は理解するであろう。

そして、彼が、このような諸點と關聯して、古典學派（アダム・スミスとその一派）が、國民經濟現象を、個人の經濟的考慮の集大成として理解しなかつたと批判していることに對してメンガー自身が含蓄させた意味は一應措くとしても、大きな問題の伏在を人々は感ずることであろう。

歴史學派の「國民主義」と並べて考えることは、もちろん、全く、當を得ていないけれども、古典學派の一部の人々が、個人の經濟的選擇行爲の集大成として、國民經濟というものを考えなかつたということは、彼等が單に「限界效用理論」を生み出さなかつたということ以上に、意味のある眞理を含んでいる。

古典學派の人々の問題は、このような個人中心主義が、國民經濟の運營に直結するための條件を分析することから出發しており、したがつて、また、このような個人中心主義の確立を、單に、等質的交換現象の量的擴大としてでなく、資本の蓄積に結びつく、勞働生産力の增大との關連において把握し、あくまでも、資本の再生産法則を軸としての、諸階級の構造的價値關與を問題にしていたことを考えるならば、個人――自由選擇競爭――全體というシェーマそのもの、また、その關聯における個人そのものは、古典學派の場合、それ自體として、問題にされ得る性質のものではなかつたと見るべき理由は、たしかにある。しかしかかるシェーマそのものが、あたかも、自然科學的思考の場合の如き、等質的、量的關係として受取られ、それ自身が、ひとり立ちして前面に押し出されてくるという事態は、ベンサムの功利主義思想において、すでに充分、觀取されるところであつて、それは、古典派經濟學とからみ合つて、經濟學體系、社會科學體系自體に、重要な變質を生ぜしめていたところでもあつた。ベンサム自身においては、各個人の極大滿足に向つての諸反應というものが、全體の幸福を構成すべき因素として、あくまでも、自由主義政策、立法原理の基礎以上にみなされなかつたのであるけれども、彼が、貨幣を快苦の量の計算單位とみなしたこと、交換價値は使用價値から生じ、使用價値に依存し、また比例すると述べたこと、富の量を幸福の量に對應するものとして、幸福遞減法則を把握したことなどは、經濟學の原理上の中心問題を、個人の評價選擇行爲の方向に移動させ、價値原理そのものに、根本的な意義轉換をもたらす大きな要素になつたのである。(註七)

J・S・ミルが、當然、この傾向を、彼の經濟學の中に反映させた。生産の自然法則視、價値論が交換論におかれ、生産費說が完全に循環論法となり、交換價値が、使用價値より大では有り得ないという、奇妙な表現の下に、主觀的評價が獨立化し稀少財貨――獨占價格の成立過程が、詳細に說かれている、などの事情は、スミス、リカードの問題點と、ミルのそれとの相異を、明瞭に現している諸點であつて、このことは、ベンサム的社會把握が、經濟學自體に與えた、構造的影響として表われたものと考えて然るべき事柄であろう。

ともあれ、彼の主張する、「單一的現象」からの國民經濟構成論、主觀主義理論の、方法論的基盤が、すでに、功利主義の影響として、特に、ミルの經濟學說――社會思想の基盤において、ほぼ確立していつたということは、否定し得ない事實であつてメンガーの理論は、彼の意識にかかわらず、かかる傾向の一つの歸結であつたとさえ言い得るのである。彼の古典學派批判はその意味で原理的には、半分しか正しいものを見ていないと言うべきであろう。

もちろん、メンガーの場合、功利主義の政策面――自由放任主義、快樂主義？　とは、無縁であるし、また、彼が、論理主義的構成論をとることによつて、ミルの如き、經驗主義的科學論の泥沼からも逃れ得た如くに見られることから、彼を功利主義思想と結びつけて考えることは意味がないという反論が、當然おこり得るであろうが、それに對する反證として、先に引用した、メンガーの語の、終りの二つが、メンガーの科學論の重要な特質を物語るものとして、クローズ・アップされて來なくてはならない。さきの引用文でわれわれの注意をひいたところの、社會現象を、對自然的個人の原理抽象によつて說明するという彼の態度が、功利主義的、經驗主義的現實表象、および科學觀の上に依據しているということが、此處にきて明らかに認められるであろう。その點に關して、マックス・ウェーバーの言うところをきこう。(註八)

「この理論の創始者（註、抽象理論の創始者、明らかにメンガーを指すものである。）が、はじめてまた唯ひとり成就したところの、法則的認識と歴史的認識との、原理的、方法的區別にもかかわらず、彼は、この抽象的理論の諸理說に對し、實在を「法則」から演繹し得るという意味での、經驗的妥當を要求した。尤も抽象的經濟理說それ自體だけで、經驗的に妥當するという意味ではなく、考察される他のすべての因素についてそれぞれの「精密理論」が構成された曉には、これらすべての抽象的理論が相寄つて、事物の眞の實在性――つまり實在のうちで知るに値いするもの――を、その中に包括するはずだ、という意味においてである。……中略……かの諸概念において、何か精密自然科學に類似せるものが作り出さるべきだという自然主義的偏見が、まさしくこの理論的思惟構成物の意味を誤解させてしまつたのである。」ウェーバーは、かの「客觀性」論文でこのようにのべている。

以上のごとき、社會像、科學觀を、いわば自明の理として前提した、メンガーの「方法論」というものが、(一)方法論それ自體の規定の上で、いかなる特質を生じ、(二)方法論爭における、彼の表面上の優越性を、いかに條件づける結果となり、(三)後にいかなる問題を殘すに至つたか、これらの諸點について、以上の考察を布えんしながら述べることが、本稿終節の課題となるであろう。

（註一）C. Menger; Untersuchungen über die Met-

hode der Socialwissenschaften und der Politischen Oekonomie insbesondere.

（註二）同書、福井、吉田氏譯書、三三頁。

（註三）同譯書、一五四頁。

（註四）同譯書七四頁。

（註五）同譯書一一一頁。

（註六）同譯書七三頁。

（註七）W. Stark, Jeremy Bentham's Economic Writings pp. 108, 115, 117, 及びスタークの Introduction を參照せられたい。

（註八）M. Weber, Wissenschaftslehre, S. 187—8.

「社會科學方法論」富永、立野譯、六九頁以下。

（四）

メンガーは、自らの理論を、論理的構成的に把握したことをもつて、經驗主義的な、心理主義的、全體的社會把握を否定し得たと信じていたのに、實際は、科學法則の總體から現實態を演繹するという、一元的、量的社會觀、科學論を有する點において、彼等と規を一にするものであつたこと、而して、メンガーが、その點に關する自覺がたらず、從つて、古典學派と自己の體系の、繼承、對決の關係を、正しく認識し得なかつたということは、彼の方法論そのものの認識の仕方、方法意識というものに、堅く結びついた事柄なのである。何故ならば、彼は、

社會科學の認識のもつ、特種な質というものを考慮し得ないため、論理學の問題と、內容の問題とを、結びあわせる「方法論」の問題を、明確に、意識し得なかつたからである。彼の、精密理論の提唱が、マックス・ウェーバーの「理念型」理論などとは全く異つて、單に、論理的抽象の問題にしか結びつき得ず、ミルの「因果法則」の考え方を、何ら改革するものでなかつたということは、その意味からして、當然のことというべきである。[註一] 彼にあつては、對象と自己とが、單に自明的、直結的に對面するのであるから、對象——內容というものと、これを受けとめる論理學の間には、理論、歷史、政策の分離という、形式的な、科學領域論しか存在し得ない結果となつた。このことは、多くの見當外れの批評を古典學派やメンガーにたいして下したシュモラーから、逆に、〃ミルは、方法論を本來取扱う資格があつたかどうか疑わしいし、メンガーは、一層然りである。〃という、一つの正しい意味を內藏する感想をのべられる理由ともなつたのである。[註二] シュモラー自身、メンガーを批判する資格が、幾多の面でかけていつたにもかかわらず、彼が、メンガーを、ミルの自然科學的論理に訓練された亞流であると言放つたとき一面の眞理を表明し得たのである。[註三]

メンガーが、理論といえども、歷史的に對象が變化する限りその內容が、歷史によつて影響されることを認める際に、精密理論は一般的抽象的な觀點に立つから、個々の現象、形態の發展する過程を、すべての時點において問題にする必要をみないけれども、精密科學が理解さるべき對象自體の變化は、當然、その範圍を變更、擴大せしめることにはなるであろうと論じたのに對し、メンガーが、歷史的觀察になした讓步は、少しも、歷史的方針の意義を理解していないと慨嘆したシュモラーの態度についても、かかる平面的、形式的、自然科學的理解を批判したものと見なすならば、同樣なことが言い得るであろう。[註四]

しかしながら、歷史學派は、單に、國家、法哲學の高みから經濟制度や、國民經濟の質的構造の重要性を說くのみであつたから、固有の經濟學、もしくは、經濟社會學を樹立することが出來ず、「すべての思惟及び認識が、抽象に基くことは自明の如くである。抽象によつて、屢々、國民經濟上の研究と眞理とに取つて代る、幽靈のような幻想、夢の如きロビンソン物語ではなく、科學的眞理が生じるように正しく抽象することのみが重要である。[註五]」というシュモラーの批評も、單なる、一片のおどし文句に終ることとなり、その方法論は、感想の域を出でず、それを出でる限り誤りに陷るというみじめな有樣を呈したのである。メンガーとシュモラーを、共通の、誤つた地盤の上に立つものとして、根本的に批判したのは、先にも觸れた如く、マックス・ウェーバーであつた。歷史學派の子を以て自認する彼は、歷史學派に對する、手きびしい自己批判として、幾多の、方法論的批判論文を書いた。ここでは、それらの事情に立入る必要はないのであるが、ただ、メンガー批判に相通じる面で彼の方法論というものを問題にせざるを得ない。彼によれば、與えられた對象を、單に自明なものとして、量的に受取り、個別化し、面的に抽象し、更に綜合して、全體的普遍的認識に至ろうとする態度というものは、社會科學的認識にとつては、無意義な目標方向であり、そのような一般的本質への昇華というものを、理論の役割に與えるのは、自然科學的偏見である。社會科學においては、單に、無前提的な面として、經濟原則が抽象されるというのではなくて、まず、個性的な、西歐資本主義の個性的秩序として、一定の意味聯關としてかかる合理性のもつ特質が、まず、問われなくてはならないのであつて、メンガーの〃理論〃は、社會現象の根本義から言つて、より一層手段的な意味を自らに附與しなければならないということになるのである。[註六] メンガーもシュモラーも、お互の論旨にまきこまれ、單に、個別、全體というような觀點で論爭した點において、何等得るところはなかつた。このような質の問題を擔うことによつて、社會科學の〃方法〃というものが、対象と論理の間に、法則の「意義」を規定する問題として現れる。ここに、ウェーバーの、文化史的社会観の方法論的重要性が見られるのである。メンガーの、方法論というものが、自然科學的方法論である限り、それは元來、方法論を持つていない、純經驗的立場であるとも言い得るであろう。[註七]

以上のような問題が、自然科學と社會科學、文化科學の、根本的相異を明にするものとして、メンガーの後に殘され、彼の、理論、歷史の分離の仕方も、再び、根本から考察されなお

さなければならないことになつた。そこで經濟社會學ともいうべき、ウェーバーの「經濟と社會」の如き領域がひらかれる。ここでは、理論が寄せ集つて、現實を演繹したり、經濟學が、倫理學や心理學の援けを借りて、社會學を構成したりするような量的把握の關心はすてられ、西歐資本主義、市民社會という個性的秩序體が、幾つかの、知るに値する觀點から作られた決疑論の下に、浮彫にされ、更に、同樣な觀點から考えられた、幾つかの、因果關係を tool として、因果的に分析されるという、質的關心が、社會科學の、原理的な意味での、中心に据えられるに至つたのであるが、その點はまた、多くの問題を含むので他日考えてみたいと思う。

（註一）J. S. Mill, System of Logic. 伊藤安二譯「社會科學方法論」

（註二）G. Schmoller, Volkswirtschaft, Volkswirtschaftslehre und- method. 戸田武雄譯「國民經濟、國民經濟學及び方法」

（註三）G. Schmoller, Zur Methodologie der Staats- und Sozialwissenschaften 戸田武雄譯、メンガー「社會科學の方法に關する研究」に附錄として所載同譯書三三〇頁。

（註四）同譯書三二三頁。

（註五）同譯書三二〇頁。

（註六）ウェーバー「社會科學方法論」富永、立野譯。

（註七）この意味において、メンガーの論理主義を、哲學的觀念論に締びつけることは、（W. Stark the History of Economics 等）あまり意味がない。

あとがき

筆者の個人的事情のために、本稿は、いろいろの點で意に滿たぬまま發表されることになつた。本來は、この稿において提示するにとどまつた論旨を展開させ、方法論史に關する論文の一端に繰み入れらるべき筈のものである。ここにおことわりして、お諒しを乞いたい。

方法論史は、社會思想史、もしくは社會哲學史に歸着せざるを得ず、したがつて、それが、經濟學と社會學の諸範疇、意味聯關を、根底から理解する鍵になることを信じている筆者は、そのような線から各學派對立の意義にせまりたい念願をもつている。それが研究上の倒錯であり、あるいは少くとも迂路であると感じられる向きが多いであろうが、筆者としては、むしろ、そこをもう一度問題にし直す必要がありはしないかと思うのである。

書評及び紹介

H. Theil, Linear Aggregation of Economic Relations

微視的經濟理論と巨視的經濟理論の結合の問題は、現代經濟學の一重要課題である。過去の經濟學の遺産の多くは限界效用均等法則、收穫遞減法則等の形で今日傳へられてきた。他方ケインズ理論の發生以後景氣變動や成長率の問題を分析するに當つては國民所得、物價等の社會的總量がとり上げられる。しかし巨視的理論は個々の消費者や企業家の態度を直接に反映することができず、微視的理論は動學の説明をするに不十分である。ここに兩者を結合して完全なる動學を作り上げるための aggregation の理論の任務があるのである。この問題はクラインによつて提起されたものであるが、ここに紹介する H. Theil, Linear aggregation of economic relations, 1955, pp. 201+IX は全著を擧げてこの問題を取扱つたものとして注目に値する。この書の内容は第一章序論、第二章一組の個人間の綜合、第三章數組の個人又は商品間の綜合、第四章時間を越へての綜合、第五章同時決定方式の綜合、第六章續論、第七章完全綜合、第八章結論、第九章數學的證明、と分れている。元來アグレゲイションには次の三つの態度がある。第一は巨視的理論の容認できる微視的理論と諸條件とを與えておいて微視的諸變數を綜合する方法で一九四六年にクラインが提唱したものである。第二は微視的理論に一定の諸條件を與えておいて綜合によつて巨視的理論を組上げる方法でメイが採つたもの、第三は一定の綜合法を前提とする巨視的理論を與えておいてこの巨視的理論に適合する樣に微視的理論を修正する法である。通常の綜合法は平均原理により指數、國民所得等を驅使して微視的理論から巨視的理論を引き出そうとする。この「類推的方法」には本質的な價値はないが問題を簡單に捉へる利點がある。又他の方法では資料が缺けているとき解けない問題をも取扱えるのでこの「現實的綜合法」が採用される。

先ず I 人の個人がいるとし各人の内生變數 y_i が先決變數（例えば價格）x_{1i}、x_{2i}……$x_{\lambda i}$ に依存するとする。t を以て時を表せば、

$$y_i(t)=\alpha_i+\sum_{\lambda=1}\beta_\lambda x_{\lambda i}(t)+u(t) \quad \cdots\cdots(1)$$

が成立する。$\alpha\beta$ は微視的パラメーターであり、u は平均値を零とする不規則變動値である。凡ての巨視的變數は微視的變數の合計であるから、

$$y(t)=\sum y_i(t)\cdots\cdots(2) \qquad x_\lambda(t)=\sum x_{\lambda i}(t)\cdots\cdots(3)$$

を得る。(1)(2)(3)から巨視的變數は次の條件を充すことになる。

$$y(t)=\alpha+\sum\beta_\lambda x_\lambda(t)+u(t)\cdots\cdots(4)$$

ここに $\alpha\beta_\lambda$ は巨視的パラメーターであり、$u(t)$ は不規則變動値である。但し $x_{\lambda i}$ がいかなる値をとつても巨視的パラメーターは一定の値をとるものと假定する。(2)(3)式の代りに加重平均法を採用する場合には、固定ウェイトを s_i, $r_{\lambda i}$ とすれば

$$y'(t)=\sum s_i y_i(t)\cdots\cdots(5) \qquad x'(t)=\sum r_{\lambda i} x_{\lambda i}(t)\cdots\cdots(6)$$

が成立する。この場合(4)式の代りに次の(7)式が成立する。

$$y'(t)=\alpha'(t)+\sum\beta_\lambda' x_\lambda'(t)+u'(t)\cdots\cdots(7)$$

(4)式を summation aggregation と呼ぶのに對し、(7)式を fixed weights aggregation と呼び、兩者を合せて linear aggregation と名付ける。

ここで問題となるのは、微視的パラメーターと巨視的パラメーターの相互關係である。(2)(3)式の $\alpha\beta_\lambda$ が第一期から第十期ま